十八世紀、ハイドンやモーツァルトの時代から十九世紀のロマン派の時代、世紀末の爛熟の時代、そして今日に至るまで、長い間ヨーロッパ音楽の中心として栄えてきたウィーン。ムジークフェラインの大ホールで聴く音楽は、まさに「伝統」そのものではないだろうか。

ウィーンフィル

一九四二年に設立されて以来、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団――通称ウィーンフィル――は、常に世界のトップクラスのオーケストラであった。

団員が全てウィーン国立歌劇場管弦楽団のメンバーで構成されているため一見国立のオーケストラのように見えるが、ウィーンフィルそのものの活動は国や市、その他外部からの制約を全く受けないフリーのオーケストラであり、楽団員はこの場において国家公務員ではない。ウィーンフィルの活動は各々の団員が国立歌劇場での義務を果たした上で、いわば余暇の時間を利用して行なわれているのだ。ウィーンでの当楽団の定期演奏会が日中に行なわれる背景にはこうした事情も含まれている。

国立歌劇場での各楽団員のノルマは年間平均約百回のリハーサルに加えてシーズン中毎月十七回（コンサートマスターは十一回）の本番、という相当に忙しいものである。

ウィーンフィルの団員は、その上にシーズン中十回のムジークフェラインにおける定期演奏会（二回公演なので実際は都合二十回）と、ジルベスターならびにニューイヤーコンサート、それにオーストリア国内を含むウィーン以外の場所での演奏会を約五十回こなしている。

ウィーンフィルとしての演奏会のためにはもちろん相当回数のリハーサルが行なわれるし、テレビ収録や

レコード録音などの仕事も加わってくる。

これ以外のプライヴェートな室内楽アンサンブルの仕事は、すべて過密スケジュールの間をぬって行われる。

ウィーンフィルのメンバーは百四十名（一九八九年現在）である。国立歌劇場管弦楽団の団員全員がウィーンフィルのメンバーではないが、双方のオーケストラの中である程度のローテーションが行なわれているため、このような激務も実現可能となる。たとえばオーケストラに不可欠のコンサートマスターは歌劇場の楽団には五人おり、そのうち四人がウィーンフィルのコンサートマスターも兼任している。

コンサートで使用される楽器は全て楽団専有の銘器である。ウィーンフィルにはフィル専用の楽器、歌劇場では劇場専用の楽器、その上にもちろん自分の愛器、と、団員は常に異なった楽器を持ち替えて演奏している。そんな所にもウィーンフィルならではの甘く美しい響きの秘密が隠されているのだろうか。特にオーボエやホルンなどはウィーン独特の仕様の楽器が使われており、このような楽器は現在でもプロ用として特別注文によって仕上げられる。

ウィーンフィルのメンバーになるにはどうしたら良いのだろう。

オーディションなどによって直接ウィーンフィルに入団する道はない。男性であることを第一条件とすれば、第二条件として国立歌劇場管弦楽団の団員である事が必須である。

では、歌劇場のオーケストラに入団するにはどうしたら良いのだろう。

まずはオーケストラの定員に空きが出るまで待たねばならない。楽団員が定年で勇退したり、一身上の理由によって退団するプレイヤーが出た場合には、公募が行なわれる。二十五人の団員で構成された審査員団のもとでのオーディションは、数段階に分けて進められる。第一次予選ではカーテンを使用し、応募者の姓名・国籍がわからないような配慮のもとに演奏を採点する。このようなカーテンつきの予選が数回重ねられる事もまれではない。こうして何回もふるいにかけられて選出された数人が、最後にはカーテンなしで普通に演奏を披露する。これにも合格すると、初めて国立歌劇場でオペラの伴奏を許されるのである。

歌劇場での研鑽を三年（このうち最初の一年は試験採用期間である）積み、ウィーンフィル入団の申請を提出すると、これについて審議が行なわれる。当然のことながら入団かなわなぬ人も出てくるが、その場合でも歌劇場管弦楽団に残るかどうかは当人の個人的判断に任せられる。歌劇場のみで演奏しているプレイヤーももちろん居り、たとえば歌劇場管弦楽団専属の女性ハーピストは、残念ながら女性であるがためにウィーンフィルに入る事ができない。

こうして選び抜かれたプレイヤー達によって構成されているオーケストラは、末席に至るまでエリートの集団である。演奏の質についてはいまさら言及するまでもないが、それと同時に「ウィーンフィルのメンバー」というステータスとプライドもなかなかなものである。

末筆ではあるが、一月一日恒例のウィーンフィルによるニューイヤーコンサートは一九四二年、楽団創立百周年にあたる年に、当時の常任指揮者クレーメンス・クラウス（一八九三～一九五四）によって始められたものである事をつけ加えておこう。